

民主主義の定着過程における市民性教育の課題

—モルディブの児童生徒の現状から—

森下 稔(東京海洋大学)

はじめに—民主化と市民性

グローバリゼーション、価値観の多様化、情報通信の高度化などを背景として、世界の至る所で民主化をめぐる動きが盛んになっている。民主化を要求する反政府運動が政権を打倒したり、政権勢力が権力を保持しながらも民主化要求を受け入れる政策に転換したりしている。前者の例としては、2010年以降の「アラブの春」と呼ばれた北アフリカ・中東諸国があげられる。後者の例としては、2011年軍事政権が民政移管されたミャンマーがあげられる。それらの多くは、軍事政権や一党独裁体制であったところで、公正な選挙による民主的な市民社会の構築が求められた。また、もともと民主主義の統治が定着しつつあるところでも、例えばタイのように、都市住民が支持する政党と農村住民が支持する政党の間で争うデモ活動が頻発する事態が起こっている。タイでは、治安維持部隊の出動により多くの死傷者という犠牲が出た。

このような民主主義の定着過程で、しばしば国家やデモ隊による暴力が行使される状況下にあつて、教育はいかなる課題を解決しなければならないのであろうか。その答えの一つは、学校教育が子どもたちにいかなる市民性をどのようにして育成するのかという点にあるだろう。すなわち、争いを平和的に解決し、民主的な市民社会を構築していくために必要な市民性の育成である。そこでは、異なる文化や考え方を理解・尊重し、人権、平和、環境、開発などの課題に関して、知識、能力、価値観・態度を身につけさせ、グローバルな社会状況の正しい理解に基づいて、ローカル、ナショナル、グローバルなレベルで判断し、行動できる人間の育成が求められる[平田編 2007]。

本稿では、このような課題意識のもと、民主主義の定着過程にあるモルディブ共和国(以下、モルディブ)の児童生徒を事例として、どのような市民性教育の課題があるかの解明を目的とする。そのために、本稿では、モルディブの社会と教育について概観した上で、児童生徒に対するアンケートの結果を分析する。

アジアにおける市民性教育の研究には、筆者が研究グループの一員として参画している平田利文の一連の共同研究がある⁽¹⁾。本研究における市民性教育研究の枠組みとアンケート調査は、この研究に準拠している。なお、本調査は、発展途上国における地域研究と開発研究のあり方を考えるための共同研究の一環として行われたものである⁽²⁾。調査にあたっては、モルディブ教育省の協力を得て行った。

1. モルディブの社会と教育

モルディブは、インド洋に浮かぶ珊瑚礁の島国である。南北823キロ、東西130キロにまたがる26アトール(環礁)からなる。2008年現在、人口約30万人で、1190島のうち約220が有人島である。水産業と観光業が主要産業であり、一人あたりGDPは4,071ドルと中進国程度である。

モルディブ諸島には、紀元前500年頃から漂着した漁民などが居住を始めたとされる。1153年に仏教からイスラームへの改宗があり、その後、スルタン統治が6王朝にわたって続いた。16世紀にポルトガルに一時統治されたが、15年間で主権を回復した。その後、インド洋に展開するイギリス海軍の影響力のもと、1887年イギリスの保護国となった。1932年モルディブ諸島初の憲法を制定したものの実情に合わず、1943年スルタン制に戻った。1953年に共和国制に移行し、大統領が元首となった。1965年、イギリスから独立するとともに国連に加盟、1972年には初のリゾートがオープンし、外国人観光客をターゲットとした観光業が叢生した。1978年に行われた大統領選挙でガユームが得票率93%という圧倒的な支持を集めて初当選した[Department of information and broadcasting 1985]。

以後、5期30年にわたりガユーム大統領の政権が維持され、一党独裁体制の強権的な政治が展開され、反政府運動には弾圧をもって臨んだ。2008年に憲法が改正され、基本的人権、複数政党制などが初めて規定され、民主化憲法と呼ばれた。同年、新憲法に基づく大統領選挙の結果、反政府運動の指導者ナシードが決選投票の末勝利した。以後、ナシード大統領の支持政党MDP(Maldivian Democratic Party)とガユーム元大統領派のDRP(Dhivehi Rayyithunge Party)を中心として小規模政党が乱立し、政治的な対立状況が生まれた。2011年南アジア地域協力連合首脳会議を議長国として主催したのを境に反ナシード派のデモ活動が頻発した。2012年2月ナシード大統領が辞任し、副大統領のワヒード氏が暫定的に大統領に就任した。その後ナシード前大統領は在任中の職権乱用罪で起訴されたが出頭に応じず、ワヒード大統領と敵対姿勢を示し、辞職と大統領選挙の即時実施を求めてMDPによるデモ活動を展開させている。ワヒードはナシードの任期一杯まで大統領職を務めた。2013年9月には2008年以来の大統領選挙が実施され、再選挙の混乱を経て、決選投票においてガユームの甥にあたるヤミーンが、ナシードを破って当選した⁽³⁾。

モルディブでは、憲法において国民はイスラームを信仰することと定められている[Azza et.al. 2008]。伝統的教育はマクタブ、マドラサの形態で行われてきた。近代的学校教育の創始は、首都マーレにおいて1927年に中等教育レベルのMajeediyya Schoolが設立されたことによるとされる。その後、1944年に女子校のAminiyya Schoolが設立され、両校とも中等教育レベルでモルディブの中核となる人材養成を担った。独立後の1970年代にマーレを中心に学校整備が着手された。地方に学校が整備される以前には、学問の修得をめざす者たちは、インド、パキスタン、セイロンなど南アジア地域の寄宿制学校で学ぶのが通例であったようである[Ministry of External Affairs, 1949: 41-58]。そこから、高等教育へはイギリスや中東、インドの大学に進学した例が見られる。現在、校長などのシニア教員の世代は、就学年齢時に地元の島で学校教育が受けられず、以上のような経歴が多く見受けられる。

1978年に初等教育完全普及政策(Universal Primary Education for All)が策定され、マーレ以外のアトールへの教育普及が推進された。初等教育7年間のナショナルカリキュラムが制定され全国統一とされるとともに、各アトールにアトール教育センター(Atoll Education Centre)とアトール学校(Atoll School)が整備された。このとき、日本の外務省による援助などで、学校が建設された[国際協力事業団 1980]。その後も、多くの住民島で学校整備が進み、就学者数は1978年の約1.5万人から2005年の約10万人へ大幅に拡大した。

現在の教育制度は、初等教育7年、前期中等教育3年、後期中等教育2年である。初等教育就学率はほぼ100%、成人識字率も98.8%に達する[Ministry of Education 2001]。このような、教育機会拡大の成果が得られた背景には、観光業による収入によってGDPが拡大成長し、上述の学校建設への投資が可能になったことがある。それでもなお、マーレとアトールの間の様々な格差の解決が課題となっている。マーレ島は南北に縦長く展開するモルディブ諸島の中央に位置し、面積わずか約1.8km²に約10万人が居住する。人口密度は1平方キロあたり5万人超で世界一の過密都市と言われる。2011年3月現在の教育統計[Ministry of Education 2011:56]によると、この島には就学前教育から後期中等教育までの学校が25校あり、ほとんどは複数の教育段階を提供している。そこに、約2.5万人の児童生徒と1,457人の教師がいる。この児童生徒のうち約1万人は地方アトールの出身で[Ministry of Education 2011:26]、就学のために親類縁者を頼ってマーレに居住している。また教師のうち28%は外国人教員である。これらのことがマーレへの人口一極集中に拍車をかけている。逆に、マーレ以外の約200の住民島は、平均人口約1,000人で学校は小規模にならざるを得ない。全国の初等・中等段階の学校のうち、300人以下の小規模校が約7割を占めている[Ministry of Education 2011:28]。どんなに小規模でも中等教育段階では教科別の教員が必要とされるため、地方においても外国人教員がおり、全教員の32%を占めている[Ministry of Education 2011:39]。観察する限り、出身国はインド、バングラデシュ、ネパールが多く、非ムスリムのものである。

カリキュラムについてみると、初等段階は国が教育課程を定めており、教授用語はすべての段階において原則として英語で、「ディベヒ語」と「イスラーム」の2教科のみディベヒ語である。前期中等教育はケンブリッジ国際試験(Oレベル)のコースシラバスにより教育課程が編成されている。1967年から2001年までは、ロンドン大学の国際試験(Edexcel International)であったが[Bray & Adam 2001]、2002年からケンブリッジ国際試験に移行した。後期中等教育に関しては、1982年から導入されたEdexcelのAレベル試験のコースシラバスに従っている。

なお、近年、初等・中等教育段階を一貫するナショナルカリキュラムが策定される動きがある。2012年7月の時点ではその原案がとりまとめられており、各教科のシラバスが構築されようとしている。教科書についても自主制作が教育省教育開発センター(Educational Development Center: EDC)によって行われている[EDC 2012]。

本稿において、主題とする市民性教育に関しては、特定の教科は準備されていない。現行の初等教育カリキュラムでは、1年から5年まで統合的な教科として「環境科」が置かれ、6年と7年に「社会科」が置かれている。内容を概観すると、世界共通の普遍的記述が多く、モルディブ特有の内容は非常に限られている。社会科の教科書[EDC 1993]を見ても、6年生の最初の学習は「宇宙」であり、その後「地球」「気象」「地理」「人間文化」「世界史」「世界の文化」と続く。モル

ディブ固有の内容は、文化学習の一部にディベヒ語に関する記述が認められる。地域学習からは始める日本の社会科の同心円拡大型教育課程とは対照的である。

2. モルディブの児童生徒の現状

筆者は、2012年8月にマレーにおいて、市民性意識に関するアンケート調査を実施した。対象は、第1学年から第9学年まで開設している政府立学校2校の第6学年100人と第9学年100人、および後期中等教育を開設している政府立学校1校・私立学校1校の第12学年の100人であり、合計300人である。各校の担当者に配布を依頼し、後日回収する方法をとった(章末に添付)⁽⁴⁾。回収数は282部、回収率は94.0%であった。なお、アンケートは教授用語である英語で実施した。

アンケートの内容構成は、平田の研究によって、国内外の先行研究、日本の学習指導要領、タイの基礎教育カリキュラムなどから市民性の資質を抽出して作成された資質表に基づいている。横軸に、「知識・技能」「能力・技能」「価値観・態度」の市民性資質の3側面を配置し、縦軸に「ローカル」「ナショナル」「リージョナル」「グローバル」「ユニバーサル」の市民性が求められる5レベルを配置した。この資質表は、そのすべての資質が求められるという前提ではなく、各国または各学校の市民性教育のバランスがどのようになっているかを判断し、教育内容の構築のための示唆を得るためのものである[平田2013]。今回のアンケートは平田グループによってASEAN加盟国で実施されたものと共通のものを使用した⁽⁵⁾。全12問のうち、Q1～Q3は「知識・理解」、Q4～Q8は「能力・技能」、Q9～Q12は「価値観・態度」の各面における市民性に関する資質や意識を問うものである[森下2013]。なお、リージョナルレベルに関しては、ASEANを「南アジア」に置き換えるなど、モルディブに応じた修正を加えた。

2-1. 知識・理解の面からみた市民性

Q1では、歴史学習の重要性について、(1)島や環礁の歴史、(2)国の歴史、(3)南アジアの歴史、(4)世界の歴史の項目別に尋ねた。選択肢はいずれも、①全く重要でない、②あまり重要でない、③重要、④とても重要な4段階とした。すべての項目について、選択肢③④の重要であるとする回答が合計で67.0%以上となり、概ね重要と考えられている。ただし、平均値で見ると、(2)国の歴史と(4)世界の歴史が順に3.58、3.36と非常に高いのに対し、(3)南アジアの歴史は2.80と相対的に低い結果が表れた。

Q2では、伝統・文化の学習の重要性について、(1)島や環礁の伝統・文化、(2)国の伝統・文化、(3)南アジアの伝統・文化、(4)世界の伝統・文化の項目別にQ1と同様の4段階法で尋ねた。結果はQ1と同様に、概ね重要と考えられている。ただし、(2)国レベルが平均値で3.66と非常に高いのに対し、(3)南アジア、(4)世界が順に2.63、2.86と相対的に低い結果となった。Q1、Q2ともASEANと比較した場合、リージョナルレベルが低いのが特徴である。

Q3では、市民性にとって重要な11の概念について、見聞の経験があるかを尋ねた。その概念とは、国際社会、社会正義や公正、平和、相互依存関係、持続的発展、環境、人権、開発、共生、異文化理解、民主主義である。選択肢は①全くない、②あまりない、③ある、④よくある、以上の4段階とした。平均値で見ると、環境(3.84)、人権(3.79)、民主主義(3.78)、平和(3.78)、開発(3.61)の5項目が見聞の機会が多く、逆に少ない概念は共生(2.12)、異文化理解(2.19)であることが明らかとなった。ASEANと比較したとき、環境、人権、平和、開発の平均値が高い傾向は共通している。民主主義が高いのはタイと同じ回答傾向であり、共生が低いのはブルネイと共通の傾向、異文化理解が低いのはカンボジアと共通の傾向である。

2-2. 能力・技能の面からみた市民性

Q4では、政治、環境、人権、紛争などに関する社会問題について、経験の程度を尋ねた。具体的な設問および回答結果は表4-1に示される通りである。その結果、全体に経験が十分ではなく、唯一(2)自分の意見を持つ経験についてのみ、「ある」とする回答が58.9%と半数を超えた。(3)意見表明と(4)行動では「全くない」が順に63.1%、53.9%を占めている。ASEANと比較したとき、最も経験が少なかったブルネイ・ベトナム・インドネシアと同様の回答傾向である。

表 4-1 Q4 の回答結果

Q4 社会問題（政治、環境、人権、紛争などに関する問題）に関して教えてください					
	①全くない	②あまりない	③ある	④よくある	平均値 標準偏差
(1) 社会問題に関して自分で調べたり、学んだりすることがありますか？	81人 28.7%	91人 32.3%	84人 29.8%	25人 8.9%	2.19 0.954
(2) 社会問題について、自分の意見を持つことがありますか？	51人 18.1%	63人 22.3%	104人 36.9%	62人 22.0%	2.63 1.021
(3) 社会問題について、世の中に対して、自分の意見を表明することがありますか？	178人 63.1%	68人 24.1%	25人 8.9%	9人 3.2%	1.52 0.790
(4) 社会問題の解決に向けて、自分から行動することがありますか？	152人 53.9%	77人 27.3%	40人 14.2%	12人 4.3%	1.69 0.871

出所：筆者作成

Q5では率直に意見表明できる相手について尋ねた。その結果では、「いえる」と「いえない」に相手によって明確に差が表れた。友人に対しては94.7%、親に対しては76.6%、学校の先生に対しては57.4%が「いえる」と回答した。大人や年上の人に対しては48.2%と半数を割り、政治家および宗教指導者に対しては「いえない」とする回答が順に48.9%、36.5%と、半数を超えないものの「いえる」の回答を上回った。

Q6では英語学習の意義について、Q7では英語能力の自己評価を尋ねた。グローバルな問題を理解し、考え、意見表明するために必要な外国語に関する意識と能力を確かめる目的である。Q6では、「英語学習はとても大切である」と82.3%の児童生徒が回答した。Q7でもかなり高い自己評価が表れた。Q7では、会話、書き、読み、聞きの4場面で、①全くできない、②あまりできない、③できる、④十分にできるの4段階の選択肢によって回答を求めた。平均値は4場面とも3.56を超えた。これは、学校における教授用語が英語であることが大きく影響していることは間違いない。しかし、ASEANで一部教科を英語で教えているブルネイやフィリピンよりもかなり高い。

Q8では、将来、市民性の資質を身につけて、望ましい生き方、暮らし方ができるかを尋ねた。具体的には次の8項目について、①全くできない、②ほとんどできない、③できる、④十分にできるの4段階の選択肢から回答を求めた。すなわち、(1)自分で何かをするとき、人に頼らず一人で決めることができる。(2)今よりも心身ともに豊かな生活を送ることができる。(3)自国や外国の文化が理解できる。(4)文化や民族が違う人たちといっしょに生活できる。(5)正しくないことや平等でないこと、差別に堂々と立ち向かっていける。(6)島や環礁、国、南アジア、世界のいろんな問題を協力しあって解決したり、行動したりできる。(7)ICT社会に対応できる。(8)世界の平和のために役立つことができる。各設問の平均値で見ると、3点以上の肯定的評価となったのが(1)(2)(4)(5)(6)の5設問となり、全体的に楽観的な将来像を描いていることが分かる。その一方で、(3)異文化理解と(7)ICT対応の平均値がともに2.87と、8設問の中では最も低く、課題と考えられる。ASEANと比較したときには、(1)意思決定は各国を上回っており、全体としてもタイとマレーシアに次ぐ高い自己評価が認められた。

2-3. 価値観・態度の面からみた市民性

Q9では、毎日の生活の中で宗教の教えをどれくらい守り、実行しているかを尋ねた。上述の通り、モルディブ国民はイスラームを信仰している。結果を見ると、選択肢のうち「(1)十分守り、実行している」を52.8%が選択した。「(2)守り、実行している」が32.6%であり、この二つの選択肢で合計85.4%を占め、ASEAN各国を上回った。宗教信仰に関しては非常に熱心であるといえる。

Q10では、モルディブ人としての道徳や誇りをもっているかを尋ねた。結果を見ると「(1)十分もっている」の回答が56.4%、「(2)もっている」の回答が28.4%であり、この二つの選択肢で合計84.8%を占めた。ASEANの多くの国では(1)の回答が80%以上となった。ASEANで最低水準であったタイやインドネシアと同じ回答傾向が表れ、ナショナルな価値については課題が見いだされる。

Q11では、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルなレベルでの市民性資質の重要性を尋ねた。各レベルでの選択肢は、表4-2に示されるとおりである。各レベルで最も大切と思う項目を選択させた上で、全28項目の中からさらに最も大切と考える項目を回答させた。結果を見ると、すべてのレベルで「平和であること」が最も重要と考えられている。全項目で最も大切と考える項目は、グローバルレベルの項目から46.8%の児童生徒が選択した。ASEANと比較すると、ブルネイとほぼ重なる回答傾向である。ASEANでは多くの国では、ローカルレベルおよびナショ

ナルレベルの「伝統文化」「郷土愛／愛国心」が最も支持されており、対照的である。モルディブの平和志向、グローバル志向が顕著に表れているといえよう。

表 4-2 Q11 の回答結果

Q11 自分が生活する地域社会，国，南アジア地域，世界に関する質問です。以下の質問に答えてください。			
Q11-1 次のうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。			
(1) 自分が島や環礁が好きで、伝統や文化を守ること	54人 (19.1%)		
(2) 島や環礁の一員であることに誇りをもつこと	15人 (5.3%)		
(3) 自分が住む島や環礁が平和であること	125人 (44.3%)		
(4) 自分が住む島や環礁の民主主義が保たれていること	17人 (6.0%)		
(5) 自分が住む島や環礁の環境や開発の問題に関心を持つこと	27人 (9.6%)		
(6) 自分が住む島や環礁の人権問題に関心を持つこと	30人 (10.6%)		
(7) 島や環礁の1人としてのアイデンティティ(帰属意識)を持つこと	12人 (4.3%)		
Q11-2 次のうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。			
(8) モルディブが好きで、伝統や文化を守ること	56人 (19.9%)		
(9) モルディブ人の一員であり、誇りをもつこと	33人 (11.7%)		
(10) モルディブが平和であること	118人 (41.8%)		
(11) モルディブの民主主義が保たれていること	21人 (7.4%)		
(12) モルディブの環境や開発の問題に関心を持つこと	20人 (7.1%)		
(13) モルディブの人権問題に関心を持つこと	22人 (7.8%)		
(14) モルディブの1人としてのアイデンティティ(帰属意識)を持つこと	10人 (3.5%)		
Q11-3 つぎのうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。			
(15) 南アジアが好きで、南アジア地域の伝統や文化を守ること	31人 (11.0%)		
(16) 南アジアの一員であることに誇りをもつこと	16人 (5.7%)		
(17) 南アジアが平和であること	120人 (42.6%)		
(18) 南アジアの民主主義が保たれていること	12人 (4.3%)		
(19) 南アジアの環境や開発の問題に関心を持つこと	40人 (14.2%)		
(20) 南アジアの人権問題に関心を持つこと	26人 (9.2%)		
(21) 南アジアの1人としてのアイデンティティ(帰属意識)を持つこと	22人 (7.8%)		
Q11-4 つぎのうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。			
(22) 地球が好きで、グローバルなルールや習慣に従って行動すること	49人 (17.4%)		
(23) 地球人であることに誇りをもつこと	8人 (2.8%)		
(24) 世界が平和であること	142人 (50.4%)		
(25) 世界の民主主義が保たれていること	16人 (5.7%)		
(26) 地球の環境や開発の問題に関心を持つこと	26人 (9.2%)		
(27) 地球の人権問題に関心を持つこと	26人 (9.2%)		
(28) 地球上の一人間としてのアイデンティティ(帰属意識)を持つこと	12人 (4.3%)		
SQ11-1 それでは、上で選んだ4つのうち、どれが最も大切だと思いますか。その番号を答えてください。() 番			
ローカル	ナショナル	リージョナル	グローバル
(1) 9人 (3.2%)	(8) 9人 (3.2%)	(15) 4人 (1.4%)	(22) 15人 (5.3%)
(2) 2人 (0.7%)	(9) 9人 (3.2%)	(16) 1人 (0.4%)	(23) 3人 (1.1%)
(3) 12人 (4.3%)	(10) 17人 (6.0%)	(17) 3人 (1.1%)	(24) 84人 (29.8%)
(4) 3人 (1.1%)	(11) 5人 (1.8%)	(18) 1人 (0.4%)	(25) 7人 (2.5%)
(5) 2人 (0.7%)	(12) 5人 (1.8%)	(19) 2人 (0.7%)	(26) 9人 (3.2%)
(6) 1人 (0.4%)	(13) 4人 (1.4%)	(20) 0人 (0.0%)	(27) 12人 (4.3%)
(7) 1人 (0.4%)	(14) 4人 (1.4%)	(21) 0人 (0.0%)	(28) 2人 (0.7%)
計 30人 (10.6%)	計 53人 (18.8%)	計 11人 (4.0%)	計 132人 (46.8%)

出所： 筆者作成

Q12では、ユニバーサルレベルの市民性を尋ねた。15の選択肢のうちから現代社会に必要なことを3項目選択するように求めた。結果を見ると「(2)お互いの気持ちを大切にし、人と仲良く暮らすこと」に64.2%の回答が集中した。Q11と同様に強い平和志向の表れとみることができる。次いで「(15)人権を尊重すること(37.6%)」「(3)わがままを言わず、がまんし、目標をやり遂げること(35.5%)」「(7)正しいことを正しいと言えること(28.7%)」「(1)自分の考えをしっかりと持ち、自分を信じること(22.7%)」「(13)地球規模の問題に関心を持ち、解決すること(22.7%)」と続いている。ASEANと比較したとき、モルディブのように一つの項目に半数以上が集中する現象はASEANでは見られないことが特色である。また、ASEANではほとんど選択されなかった「(14)意思決定し、行動すること」が14.9%が選択されていることにも注目される。

おわりに

以上の分析から、モルディブ児童生徒の市民性における特色をまとめ、モルディブにおける市民性教育の課題を考察する。

最大の特色は、宗教信仰に非常に熱心であり(Q9)、平和志向が非常に強い(Q11、Q12)ことである。また、英語学習の意義を強く認識し(Q6)、英語能力に関する自己評価が高い(Q7)ことも特筆すべきである。さらに、グローバル志向が強い(Q1、Q11)こともうかがえる。これらの強みを生かしながら、市民性教育の課題に取り組むことが望まれる。

他方、児童生徒の現状から見た市民性教育の課題については次のように指摘できる。

第一に、知識・理解の面では、リージョナルレベルでの意識を高めること、すなわち南アジアの一員であることについての学習を促進することが課題である(Q1、Q2)。また、「共生」「異文化理解」の学習機会をどのように考えるかも課題である(Q3)。モルディブでは珊瑚礁が海面上に現れた面積のわずかな島々が散在し、島での生活は全島民が家族同様の親密さをもって営まれている。他方、水平線上に見える近隣の島以外に、外界を想起しにくい環境でもある。グローバル社会における他者との交わりの意識や価値をどのように育むか、困難な課題である。

第二に、能力・技能の面では、社会問題への主体的な取り組みの能力を高める機会を増やすことが課題として指摘できる(Q4)。民主的な市民社会の構築を求める運動に、大人たちが活発に参加している一方で、児童生徒がどのようにして民主主義社会の後継者として育てられるべきかはモルディブ社会全体で考えられなければならないだろう。

第三に、価値観・態度の面では、モルディブ人としての誇りや道徳の涵養が求められるであろう(Q10)。ナショナルな意識が他国と比べて薄いことは、グローバル志向が強いことの裏返しでもあるが、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルの各レベルでバランスの取れた価値観を構築することが必要と考えられる。そもそもモルディブらしさとは何かを改めて問われなければならない。教授用語が英語であり、教師の3分の1が外国人である現在の学校の状況、外国人観光客に頼る産業構造、普遍的な世界観をもつイスラーム信仰など、モルディブらしさの護持と継承には、乗り越えなければならない教育と社会の現状がある。

最後に、以上のモルディブの事例から、民主主義の定着過程における市民性教育の課題に関する考察を試みる。モルディブの社会と教育の現状から理解される通り、民主的な憲法が制定され、公正な選挙による政治が行われることにより、民主化の進展が見られても、教育内容や指導方法の改善・改革が行われるまでには時間が必要とされる。そのため、民主主義社会における望ましい市民性は教育課程上は明示されない。モルディブの場合は修了資格を国際試験に頼っているため、モルディブ人としての誇りや一体感に関わる内容を構築することに一層の困難がある。他方、児童生徒は情報化が進む中で、学校教育以外の経路によって、身の回りの社会の出来事を体感し、無意図的に価値観や態度を形成している。そのため、意識の実態からみた児童生徒の市民性には強みと弱点が混在している。今回の調査結果をみたモルディブ教育省幹部の関心は、Q10におけるモルディブ人としてのアイデンティティが予想外に不十分であったことに向けられた。市民性教育の課題は、どのような市民性が望ましいかを民主的に構築した上で、実態を踏まえた内容・方法等の開発に取り組むことにあると考えられる。

【注】

(1)現在は、ASEAN10 各国における市民性教育とアセアンネスのための教育に関する研究が進行中である(平成 22～25 年度科学研究費補助金基盤研究(A)「ASEAN 諸国における市民性教育とアセアンネスのための教育に関する国際比較研究」、研究代表者:平田利文)。

(2)平成 21～24 年度科学研究費補助金基盤研究(A)「発展途上国教育研究の再構築:地域研究と開発研究の複合的アプローチ」(研究代表者:山田肖子)

(3)モルディブ共和国における近年の政治的な動向に関しては、地元新聞各紙の電子版を参照した。ミアドゥ紙:<http://www.miadhu.com/>。サン紙:<http://sun.mv/english/>。ハビール紙:<http://www.haveeru.com.mv/>。

(4)筆者自身が回答に立ち会う方法をとる予定で臨んだが、ラマダン(断食月)中の短縮授業期間中であつたため、教育省と協議の上で留置法を採用した。

(5)ASEAN 加盟 10 各国のうち、調査結果が得られているのはブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、タイ、ベトナムの 8 各国である。本文中で ASEAN 各国のデータに言及する場合には、これら 8 各国を指す。

【参考文献】

国際協力事業団 1980 『モルディブ共和国学校建設計画基本設計調査報告書』。

- 平田利文編 2007 『市民性教育の研究—日本とタイの比較』東信堂。
- 平田利文 2013 「地域統合をめざす ASEAN 諸国における市民性教育」『比較教育学研究』第 46 号、104-117 頁。
- 森下稔 2012 「モルディブの教育」日本比較教育学会編『比較教育学事典』東信堂、377-378 頁。
- 森下稔 2013 「ASEAN 諸国における市民性に関する児童生徒へのアンケート調査」『比較教育学研究』第 46 号、118-133 頁。
- Azza, Fathimath et.al. 2008 Education for all: Mid-decade Assessment National report, Ministry of Education, Republic of Maldives.
- Bray, Mark and Adam, Khadeeja 2001 'The dialectic of the international and the national: secondary school examinations in Maldives', International Journal of Educational Development, vol.21, pp. 231-244.
- Department of information and broadcasting 1985 Maldives: A Historical Overview, Government of the Republic of Maldives.
- Educational Development Centre 1993 Social Studies 1: Grade 6, Million Book Shop, Male.
- Educational Development Centre 2012 (Draft) The National Curriculum Framework, Ministry of Education, Republic of Maldives.
- Hussain, Dheena 2008 Functional Translation of the Constitution of the Republic of Maldives 2008, Ministry of Legal Reform, Information and Arts, Republic of Maldives.
- Ministry of Education 2001 EFA Plan of Action Maldives 2001, Follow-up to Dakar Framework for Action, Republic of Maldives.
- Ministry of Education 2011 School Statistics 2011, Republic of Maldives.
- Ministry of External Affairs 1949 Maldivian Islands, Ladies & Gentlemen The Maldivian Islands!, M. D. Gunasena & CO. LTD., Colombo, Ceylon, pp.41-58.

※本稿は、森下稔「民主主義の定着過程における市民性教育の課題—モルディブの児童生徒の現状から—」（『九州教育学会研究紀要』第 40 号、2013 年 8 月刊、105-112 ページ。）に一部加筆修正を加えたものである。

市民性教育に関するアンケート調査 アジア諸国における比較研究 (モルディブ児童生徒版)

児童生徒のみなさんへ

このアンケートは、アジアの人々がよい市民になるための教育をどのようにすればよいかについて考えるための調査です。

これはテストではありません。あなたの考えをそのまま回答してください。コンピューターで処理しますので、みなさん一人ひとりの考えが他人に知られることは全くありません。安心して回答してください。

2012年

◇以下の質問に教えてください

- F1 あなたの国（ モルディブ共和国 100% ）
- F2 あなたの学校がある都市名（ マーレ 100% ）
- F3 あなたの学校名（ Jamaluddin 98人、Imaduddin 94人、Center for Higher Secondary Education 44人、Villa College 46人 合計282人）
- F4 性別： （1）男性 40.1% （2）女性 58.9%
- F5 年齢：（ ）歳
- F6 学年：（G6 100人 35.5%、G9 92人 32.6%、G12 90人 31.9%）
- F7 あなたが信仰する宗教は何ですか
 (1) 仏教 (2) カトリック/プロテスタント (またはキリスト教) (3) 儒教
 (4) ヒンドゥー教 (5) イスラーム 100% (6) シーク教 (7) 道教
 (8) その他（ ） (9) 無宗教

Q1 あなたは、歴史について学習する場合、次の地域の歴史はどれくらい重要だと思いますか。

	①全く重要でない	②あまり重要でない	③重要	④とても重要	平均値
					標準偏差
(1) <u>自分が住む島や環礁の歴史</u>	18人 6.4%	54人 19.1%	100人 35.5%	107人 37.9%	3.06 0.913
(2) <u>自分の国の歴史</u>	4人 1.4%	20人 7.1%	66人 23.4%	190人 67.4%	3.58 0.689
(3) <u>南アジアの国々の歴史</u>	19人 6.7%	71人 25.2%	135人 47.9%	54人 19.1%	2.80 0.827
(4) <u>世界の歴史</u>	16人 5.7%	28人 9.9%	75人 26.6%	160人 56.7%	3.36 0.882

SQ1-1 上記(1)～(4)以外で、重要と思う歴史がある場合は、下記に具体的に記入してください。(イスラームの歴史、家族の歴史、宇宙の歴史 など)

Q2 あなたは、伝統・文化(昔から受けつがれているものや、生活のしかた・習慣など)の学習では、次の地域の伝統・文化はどれくらい重要だと思いますか。

	①全く重要でない	②あまり重要でない	③重要	④とても重要	平均値
					標準偏差
(1) <u>自分の住んでいる島や環礁の伝統・文化</u>	13人 4.6%	45人 16.0%	102人 36.2%	119人 42.2%	3.17 0.864
(2) <u>自分の国の伝統・文化</u>	3人 1.1%	12人 4.3%	62人 22.0%	200人 70.9%	3.66 0.615
(3) <u>南アジア地域の伝統・文化</u>	30人 10.6%	91人 32.3%	108人 38.3%	49人 17.4%	2.63 0.896
(4) <u>世界中にはいろいろな伝統・文化</u>	33人 11.7%	61人 21.6%	97人 34.4%	89人 31.6%	2.86 0.996

SQ2-1 上記(1)～(4)以外で、重要と思う伝統・文化がある場合は、下記に具体的に記入してください。(イスラームの伝統・文化 家族の伝統・文化 など)

Q3 あなたは、以下の言葉をみたり、聞いたりしたことがありますか。

	①全くない	②あまりない	③ある	④よくある	平均値 標準偏差
1 国際社会	24人 8.5%	70人 24.8%	122人 43.3%	66人 23.0%	2.81 0.888
2 社会正義や公正	25人	46人	102人	107人	3.04

	8.9%	16.3%	36.2%	37.9%	0.951
3 平和	2人 0.7%	8人 2.8%	40人 14.2%	227人 80.5%	3.78 0.525
4 相互依存関係	29人 10.3%	74人 26.2%	101人 35.8%	73人 25.9%	2.79 0.953
5 持続的発展	48人 17.0%	89人 31.6%	84人 29.8%	60人 21.3%	2.56 1.010
6 環境	1人 0.4%	3人 1.1%	35人 12.4%	243人 86.2%	3.84 0.418
7 人権	3人 1.1%	4人 1.4%	42人 14.9%	233人 82.6%	3.79 0.508
8 開発	5人 1.8%	18人 6.4%	55人 19.5%	196人 69.5%	3.61 0.693
9 共生	85人 30.1%	101人 35.8%	68人 24.1%	25人 8.9%	2.12 1.1%
10 異文化理解	74人 26.2%	104人 36.9%	72人 25.5%	28人 9.9%	2.19 0.945
11 民主主義	4人 1.4%	8人 2.8%	39人 13.8%	230人 81.6%	3.78 0.570

Q4 社会問題（政治，環境，人権，紛争などに関する問題）に関して教えてください

	①全くない	②あまりない	③ある	④よくある	平均値 標準偏差
(1) 社会問題に関して自分で調べたり、学んだりすることがありますか？	81人 28.7%	91人 32.3%	84人 29.8%	25人 8.9%	2.19 0.954
(2) 社会問題について、自分の意見を持つことができますか？	51人 18.1%	63人 22.3%	104人 36.9%	62人 22.0%	2.63 1.021
(3) 社会問題について、世の中に対して、自分の意見を表明することができますか？	178人 63.1%	68人 24.1%	25人 8.9%	9人 3.2%	1.52 0.790
(4) 社会問題の解決に向けて、自分から行動することができますか？	152人 53.9%	77人 27.3%	40人 14.2%	12人 4.3%	1.69 0.871

Q5 あなたは、次のような人に対して、正しいことは正しい、間違いは間違いだと意見を述べることができますか。

	1 いえる	2 いえない	3 わからない
(1) 友人に対して	267人 94.7%	4人 1.4%	10人 3.5%
(2) 親に対して	218人 76.6%	38人 13.5%	9.2人 9.2%
(3) 学校の先生に対して	162人 57.4%	64人 22.7%	55人 19.5%
(4) 大人や年上の人に対して	136人 48.2%	81人 28.7%	63人 22.3%
(5) 政治をする人に対して	59人 20.9%	138人 48.9%	81人 28.7%

(6) 宗教指導者に対し	102人 36.2%	103人 36.5%	75人 26.6%
--------------	---------------	---------------	--------------

Q6 あなたは、英語の学習は大切だと思いますか。

(1) とても大切である	232人	82.3%
(2) 大切である	40人	14.2%
(3) あまり大切でない	4人	1.4%
(4) 全く大切でない	1人	0.4%
(5) わからない	0人	0.0%

Q7 あなたの英語の能力について教えてください。

	① 全く でき ない	②あ まり でき ない	③で きる	④十 分 に で きる	平均値 標準偏差
英語で外国の人と会話ができる	2人 0.7%	7人 7.5%	104人 36.9%	169人 59.9%	3.56 0.583
英語で手紙やメールのやりとりをする	1人 0.4%	9人 3.2%	92人 32.6%	180人 63.8%	3.60 0.571
英語の雑誌・新聞・ウェブサイトを見る	0人 0.0%	1人 0.4%	49人 17.4%	232人 82.3%	3.82 0.395
テレビ・ラジオで英語のニュースや番組を視聴する	0人 0.0%	6人 2.1%	47人 16.7%	229人 81.2%	3.79 0.457

Q8 あなたは、将来、次のようなことができると思いますか。

	①全 く でき ない	②ほ と んど で き ない	③で きる	④十 分 で きる	平均値 標準偏 差
(1) 自分で何かをするとき、人に頼らず一人で決めることができる。	5人 1.8%	28人 9.9%	139人 49.3%	110人 39.0%	3.26 0.705
(2) 今よりも心身ともに豊かな生活を送ることができる。	3人 1.1%	26人 9.2%	154人 54.6%	96人 34.0%	3.23 0.655
(3) 自国や外国の文化が理解できる。	8人 2.8%	84人 29.8%	120人 42.6%	65人 23.0%	2.87 0.800
(4) 文化や民族が違う人たちといっしょに生活できる。	16人 5.7%	48人 17.0%	130人 46.1%	85人 30.1%	3.02 0.842
(5) 正しくないことや平等でないこと、差別に堂々と立ち向かっていける。	23人 8.2%	48人 17.0%	112人 39.7%	97人 34.4%	3.01 0.922
(6) 島や環礁、国、南アジア、世界のいろんな問題を、協力しあって解決したり、行動したりできる。	13人 4.6%	38人 13.5%	147人 52.1%	84人 29.8%	3.07 0.784
(7) ICT社会に対応できる。	13人	78人	121人	67人	2.87

	4.6%	27.7%	42.9%	23.8%	0.831
(8) 世界の平和のために役立つことができる。	17人	56人	120人	87人	2.99
	6.0%	19.9%	42.6%	30.9%	0.870

Q9 あなたは、毎日の生活の中で自らの宗教／信仰の教えを、どれくらい守り、実行していますか。

- (1) 十分守り、実行している 149人 (52.8%)
- (2) 守り、実行している 92人 (32.6%)
- (3) あまり守ったり実行したりしていない 33人 (11.7%)
- (4) まったく守ったり実行したりしていない 6人 (2.1%)
- (5) 特定の宗教／信仰をもっていない 0人 (0.0%)

Q10 あなたは、モルディブ人としての道徳や誇りをもっていますか

- (1) 十分もっている 159人 (56.4%)
- (2) もっている 80人 (28.4%)
- (3) あまりもっていない 35人 (12.4%)
- (4) 全くもっていない 5人 (1.8%)

Q11 自分が生活する地域社会、国、南アジア地域、世界に関する質問です。以下の質問に教えてください。

Q11-1 次のうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。

- (1) 自分が島や環礁が好きで、伝統や文化を守ること 54人 (19.1%)
- (2) 島や環礁の一員であることに誇り（自慢に思い、うれしく思うこと）をもつこと 15人 (5.3%)
- (3) 自分が住む島や環礁が平和であること 125人 (44.3%)
- (4) 自分が住む島や環礁の民主主義が保たれていること 17人 (6.0%)
- (5) 自分が住む島や環礁の環境や開発の問題に関心を持つこと 27人 (9.6%)
- (6) 自分が住む島や環礁の人権問題に関心を持つこと 30人 (10.6%)
- (7) 島や環礁の1人としてのアイデンティティ（帰属意識）を持つこと 12人 (4.3%)

Q11-2 次のうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。

- (8) モルディブが好きで、伝統や文化を守ること 56人 (19.9%)
- (9) モルディブ人の一員であり、誇りをもつこと 33人 (11.7%)
- (10) モルディブが平和であること 118人 (41.8%)
- (11) モルディブの民主主義が保たれていること 21人 (7.4%)
- (12) モルディブの環境や開発の問題に関心を持つこと 20人 (7.1%)
- (13) モルディブの人権問題に関心を持つこと 22人 (7.8%)
- (14) モルディブの1人としてのアイデンティティ（帰属意識）を持つこと 10人 (3.5%)

Q11-3 つぎのうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。

- (15) 南アジアが好きで、南アジア地域の伝統や文化を守ること 31人 (11.0%)
- (16) 南アジアの一員であることに誇りをもつこと 16人 (5.7%)
- (17) 南アジアが平和であること 120人 (42.6%)
- (18) 南アジアの民主主義が保たれていること 12人 (4.3%)
- (19) 南アジアの環境や開発の問題に関心を持つこと 40人 (14.2%)
- (20) 南アジアの人権問題に関心を持つこと 26人 (9.2%)
- (21) 南アジアの1人としてのアイデンティティ（帰属意識）を持つこと 22人 (7.8%)

- Q11-4 つぎのうちどれが最も大切だと思いますか。1つだけ選んでください。
- (22) 地球が好きで、グローバルなルールや習慣に従って行動すること 49人 (17.4%)
 - (23) 地球人であることに誇りをもつこと 8人 (2.8%)
 - (24) 世界が平和であること 142人 (50.4%)
 - (25) 世界の民主主義が保たれていること 16人 (5.7%)
 - (26) 地球の環境や開発の問題に関心を持つこと 26人 (9.2%)
 - (27) 地球の人権問題に関心を持つこと 26人 (9.2%)
 - (28) 地球上の一人間としてのアイデンティティ (帰属意識) を持つこと 12人 (4.3%)

SQ11-1 それでは、上で選んだ4つのうち、どれが最も大切だと思いますか。その番号を答えてください。
() 番

ローカル	ナショナル	リージョナル	グローバル
(1) 9人 (3.2%)	(8) 9人 (3.2%)	(15) 4人 (1.4%)	(22) 15人 (5.3%)
(2) 2人 (0.7%)	(9) 9人 (3.2%)	(16) 1人 (0.4%)	(23) 3人 (1.1%)
(3) 12人 (4.3%)	(10) 17人 (6.0%)	(17) 3人 (1.1%)	(24) 84人 (29.8%)
(4) 3人 (1.1%)	(11) 5人 (1.8%)	(18) 1人 (0.4%)	(25) 7人 (2.5%)
(5) 2人 (0.7%)	(12) 5人 (1.8%)	(19) 2人 (0.7%)	(26) 9人 (3.2%)
(6) 1人 (0.4%)	(13) 4人 (1.4%)	(20) 0人 (0.0%)	(27) 12人 (4.3%)
(7) 1人 (0.4%)	(14) 4人 (1.4%)	(21) 0人 (0.0%)	(28) 2人 (0.7%)
計 30人 (10.6%)	計 53人 (18.8%)	計 11人 (4.0%)	計 132人 (46.8%)

Q12 現代社会では、どのようなことが必要だと思いますか。次の中から三つ選んでください。

- (1) 自分の考えをしっかりともち、自分を信じること 64人 (22.7%)
- (2) お互いの気持ちを大切にし、人と仲良く暮らすこと 181人 (64.2%)
- (3) わがままを言わず、がまんし、目標をやり遂げること 100人 (35.5%)
- (4) 落ちついて、冷静に判断すること 39人 (13.8%)
- (5) ボランティア、助け合いなど、公共や人類にとって役立つことをすること 28人 (9.9%)
- (6) 基本的な倫理 (人としてまもるべき道)、道徳をもつこと 8人 (2.8%)
- (7) 正しいことを正しいと言えること 81人 (28.7%)
- (8) 社会をよりよくするための活動に参画すること 23人 (8.2%)
- (9) 法律を大切にすること 22人 (7.8%)
- (10) 国際的に協力しあって、問題解決を図ること 15人 (5.3%)
- (11) 世界の経済や科学技術の革新に乗り遅れないこと 25人 (8.9%)
- (12) 世界の文化 (生活や行動の仕方、習慣) の違いを理解し、大切にすること 19人 (6.7%)
- (13) 地球規模の問題 (環境、貧困、紛争、平和、差別、人権、開発など) に関心を持ち、解決すること 64人 (22.7%)
- (14) 意思決定し、行動すること 42人 (14.9%)
- (15) 人権を尊重すること 106人 (37.6%)

—ご協力ありがとうございました—